

望月春江

1893-1979

四季の美を愛で

描き続けた日本画家

草花や昆虫の写生に
夢中になった少年時代

明治26(1893)年、西山梨郡住吉村増坪(現・甲府市増坪町)に生まれた春江(本名・尚)は、幼い頃から草花や昆虫などを丹念に観察するのが何よりの楽しみだった。

山梨県立甲府中学校(現・甲府一高)時代は医師を目指して勉強に励み、特待生で卒業。医学大学への進学を目指して上京したが、その年の夏、春江が中学時代に描いた人物画を目にした美術史家中川忠順の「君の絵は素晴らしい。ぜひとも画家になりなさい」という一言が、春江の心を突き動かし、「何より好きな画業の道を貫こう」と決心させた。

「春に生きんとす」から
生まれた雅号「春江」

大正3(1914)年、春江は東京美術学校(現・東京芸術大学)日本画科に入学し、結城素明らに学ぶ。大正8(1919)年に首席で卒業し、その後も研究科に残り勉強を続け、東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学)の講師となった。

大正10(1921)年、「春に生きんとす」が第2回帝展(現・日展)で初入選。この作品の制作中、恩師の中川忠順から「春江」の雅号が贈られた。昭和3(1928)年、第9回帝展で「趁春」が特選。昭和4(1929)年には、春江を生涯支え続けることとなる芳子夫人と結婚し、この年「明るさかぐのこの実」で連続特選を受賞。日本画家として不動の地位を築くようになる。

心を通して描き続けた
日本の美の世界

古希を過ぎてから、春江の作品は輝きを一層増し、鮮やかな色彩や金箔などが施されるようになった。しかし、春江は「実物を写すだけでは実物に劣る絵しか描けないことになる。自分の心を通して描いてこそ絵に光が増す」。この言葉をいつも胸におき、日本の美を描き続けた。

昭和53(1978)年11月の山梨県立美術館オープンに先立ち、春江の作品20点が寄贈されることとなった。春江は、完成間近の県立美術館を訪れ、「この美術館は日本一だ」と言い、自分の作品が飾られることを心から喜んでいったという。

昭和54(1979)年2月13日、病院のベットの上で「描くんだ、描くんだ」という言葉を最後に画家春江は、85歳の生涯を閉じた。



花や鳥など自然の生命力を見事に表し、写実的な中にも柔らかさのある独自の日本画を確立した望月春江。心を通して描き出したその作品は、現代画壇に新しい風を吹き込み、今なお色鮮やかに輝きを放っている。



自宅の庭で、ユリの花をじっと見つめる春江。スケッチは、納得するまで何枚も描いていた

望月春江の作品

▲《惜春》(1978年)(山梨県立美術館蔵)
入退院を繰り返していた84歳の時に描き上げた作品。制作の傍らでは、いつも芳子夫人が見守っていた。この作品はコラニー文化ホール 大ホールの緞帳(どんちょう)にもなっている



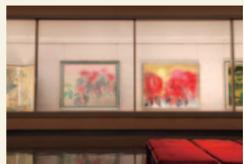
▲《春に生きんとす》(1921年)
描かれている「まるい丘」は、幼い頃から慣れ親しんだ郷里、甲府市増坪の風景と重なっている。「春」を描くことが好きな春江は、色鮮やかな山梨の春を思い描いていた

▲最後の作品となった《向日葵》(1978年)(山梨県立美術館蔵)
石和で出会った見事なヒマワリに魅せられ、描いた作品。東京都美術館に飾られた作品を前に、春江は、「満足だ」と言っていたという



県立美術館

常設展示室では、望月春江や穴山勝堂、近藤浩一路など山梨県ゆかりの画家を中心に、日本画を展示。四季を表現した日本画の世界を堪能することができる



甲府市真川1-4-27

TEL 055-228-3322

山梨県立美術館

検索

